

心の原風景

—俳句と俳画の世界—

The Primal Scene of Human Heart —The World of Haiku and Haiga—

山本 健一

Kenichi YAMAMOTO

Abstract

This paper traces the historical background of *haiku* (traditional Japanese short poems) and *haiga* (seasonal picture-poem of Japan) in the first stage and analyzes the mechanism of the primal scene of human heart from the various aspects of philosophical approach, literal feature, psychological hypothesis, and architectural style in the second stage. According to the historical map of haiku poets, we pick up the famous haiku and haiga created by the outstanding haiku poets in Edo period, that is, the three haiku masters; Basho Matsuo, Buson Yosa, and Issa Kobayashi who founded the main stream of traditional short poems in Japan in the third stage. In the last stage, we also refer to the significance and evaluation for the primal image of haiku and haiga.

Keywords :俳句、俳画、心、原風景

はじめに

本稿では、我々日本人の心に受け継がれてきた芸術、すなわち文芸や絵画などの伝統芸術に内在する原初のイメージを「心の原風景」と呼ぶことにし、その意味と意義を複数の視点から解明する。さらに江戸俳諧の巨匠である松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶たちの俳句や俳画に見られる心の原風景のイメージを取り上げ、彼らが発展させた俳句や俳画などの短詩型文学の歴史と重ね合わせながら、その成立から展開、その意義と評価などに関して考察し、合わせて短詩型文学の魅力について述べる。

1. 俳句の歴史

論を進めるにあたり、関連事項として俳句や俳画などの歴史を大きく時系列にまとめる。

・歌謡 (大和、奈良時代)

記紀歌謡：古事記(712)、日本書紀(720)

和歌：長歌 (5・7、5・7、……5・7、7)

旋頭歌 (5・7、7、5・7、7)

短歌 (5・7・5、7・7)

万葉集(759)、古今集(905)、新古今集(1205)

連歌 (和歌から派生、鎌倉から室町にかけて流行)

俳諧の連歌：短歌の長句 (5・7・5) と短句 (7・7)

とを交互に詠みすすめる。

山崎宗鑑、荒木田守武

・俳諧 (江戸時代)

松永貞徳：貞門派 (式目)

西山宗因：談林派 (奔放奇抜な表現)

蕉風の先駆

小西来山、池西言水、椎本才麿、山口素堂、上島鬼貫
川柳：柄井川柳 (1718-1790)

「俳風柳多留」1765：「うがち・おかしみ・かるみ」：
人情の機微をついた句。

松尾芭蕉(1644-1694) (寛永・元禄期)

幽玄美と閑寂美との融合に成る「さび」、閑寂枯淡の
美、俳諧の芸術性を追求した。奥の細道(1689)。

蕉門の十哲：榎本基角、服部嵐雪、森川許六、内藤丈
草、向井去来、各務支考、杉山杉風、志田野坡、越知
越人、立花北枝

その他 野沢凡兆、山本荷兮、河合曾良

与謝蕪村(1716-1783) (天明期)

江戸俳諧の巨匠の一人であり、江戸俳諧中興の祖、イ
メージ豊かな俳画の創始者であり、写実的で絵画的な
句を得意とした。当時の俳諧 (技巧主義と通俗化) を
憂い『蕉風回帰』を唱えた。

小林一茶(1763-1827) (文化・文政期)

継母との確執、貧しさや生活苦、家族の喪失などから、自虐的な俳句も見られるが、平明かつ素朴で、共感しやすい句が多い。

・俳句 (明治以後)

正岡子規(1867-1902) 明治時代

『懶祭書屋俳諧』1893年以後、俳句革新運動を起し、江戸時代の俳諧から発句(5・7・5)をとりだして、「俳句」とする。あるがままのものをあるがままに写す写生を唱え、蕪村の客観的、絵画的な句風を模範とする。1897年に句誌「ホトトギス」を主宰。

高浜虚子(1874-1959) 明治・大正・昭和時代

ホトトギスの指導者

季題と定型

客観写生(花鳥諷詠) → 花鳥に代表される自然を心に感じて詠嘆する。

その他の俳人に村上鬼城、飯田蛇笏、渡辺水巴等がいる。

・昭和時代の俳人たち

昭和初期：水原秋桜子、山口誓子、

人間探求派：中村草田男、石田波郷、加藤楸邨、

新興俳句：日野草城、西東三鬼、秋元不死男、

昭和のホトトギス：富安風生、山口青邨

女流俳句：中村汀女、星野立子、橋本多佳子、三橋鷹女

情緒的：大野林火、安住敦

昭和中期：飯田龍太、森澄雄、金子兜太

個性派：平畑静塔、永田耕衣、細身綾子、中村苑子

俳句作りの留意点

定型：5・7・5の17音に当てはめる。

季語：歳時記などにおける季節を表す言葉を入れる。

切れ字：や・かな・けり → 詠嘆・余情・余韻

省略：核心を突き、簡潔な表現を心がけ、それ以外は削る。

写生：客観写生 → 物心一如 → 主客合一

①ものを客観的に見て正確に写す。

②作者が景色を見て心に映じた影を描く。

③眼に見えるものを写すことによって目に見えない世界をとらえる。

④実態把握、すなわちその姿、その表情をすかさずはつきりとらえる。

⑤命のふれあい、命の確認。

2. 日本における水墨画の歴史：

・古墳時代の壁画：墨・朱・緑・黄などの色が使用されている。

・飛鳥・奈良時代以後：仏画・禅画・水墨画・文人画・書などが中国大陸を経て、朝鮮半島から渡来した。高山寺の「鳥獣戯画」などもその一つ。

・平安時代：密教の伝来とともに、仏像、仏具、曼荼羅等の複雑な図形伝えるため「密教図像」が多数制作された。

・鎌倉時代：禅とともに伝来。『達磨図』・『瓢鮎図』などのように禅の思想を表すものであったが、風景を描く山水画も描かれるようになった。

・町時代中期から江戸時代・明治時代へ

如拙(生没年不詳)：南北朝時代から室町時代中期の画僧。

周文(?-1454)：日本における水墨画の先駆者。

雪舟(1420-1506)：日本における水墨画の大家。

狩野元信(1476-1559)、狩野永徳(1543-1590)、狩野山楽(1559-1635)、

狩野探幽(1602-1674)、尾形光琳(1658-1716)

雪村(1504-1589)、海北友松(1533-1615)、長谷川等伯(1539-1610)

俵屋宗達(生年未詳-1643?)、宮本武蔵(1584?-1645)、白隠(1686-1769)

彭城百川(1697-1752)、与謝蕪村(1716-1783)、伊藤若冲(1716-1800)

池大雅(1723-1776)：与謝蕪村とともに、日本の文人画(南画)の大成者。

丸山応挙(1733-1795)、浦上玉堂(1745-1820)、田能村竹田(1777-1835)

山本梅逸(1783-1856) 富岡鉄斎(1836-1924)、竹内栖鳳(1864-1942)、

横山大観(1868-1958)：朦朧体、川合玉堂(1873-1957)：近代日本画の巨匠、

3. 俳画の歴史

・室町時代：連歌の発生とともに、初期の俳画が試みられた。

山崎宗鑑(1465?-1553?)：荒木田守武とともに、俳諧の祖。書家としても有名。卑俗奔放な句風。辞世の歌「宗鑑はいつくへと人の問うならばちとよう(ヨウ)がありてあの世へといへ」。

荒木田守武(1473-1549)：山崎宗鑑から連歌を学び、宗鑑同様、俳諧文学の祖といわれる。代表作は、「落花枝にかへるを見れば胡蝶かな」など。

心の原風景 —俳句と俳画の世界—

- ・江戸時代：俳諧の隆盛とともに俳画も発展した。俳画は書画共存の表現形式である。その特徴として、①省筆 ②余白 ③淡彩 ④稚拙などがある。

野々口立圃 (1595-1669)：俳画の祖。

松尾芭蕉 (1644-1694)：俳画愛好家にして、俳句と俳画の一体的世界を表現。

英 一蝶 (1652-1724)：俳人宝井其角とともに、町人たちの風俗を描く人気絵師。

森川許六 (1656-1715)：芭蕉の弟子であり、俳画の師。

尾形乾山 (1663-1743)：光琳の弟で絵師、陶工。

与謝蕪村 (1716-1783)：俳画形式の完成者。「俳諧もの草画」。格調、去俗、誇張された人物が中心。

三浦樗良 (1729-1780)：伊勢の中興六大家の一人。自由奔放。蕪村門下。

高井几董 (1741-1789)：蕪村門下で蕪村を補佐。

井上士朗 (1742-1812)：俳諧のほか、平曲、絵画、国学など幅広い。

夏目成美 (1749-1816)：一茶の良き庇護者。書画。俳壇に資金面で貢献。

仙崖 (1750-1837)：禅味溢れる奔放な絵画。

松村月溪 (1752-1811)：蕪村の弟子。蕪村の影響が見られ、俳諧、文人画などが得意。

酒井抱一 (1761-1828)：尾形光琳に教わる。琳派の装飾的な画風が特徴。

建部巢兆 (1761-1814)：書、絵とも優れ、句も気品がある。

谷 文晁 (1763-1840)：江戸時代後期の江戸南画の大成者。

小林一茶 (1763-1828)：風土に根ざした平易かつ素朴な俳画作品。稚拙な味わいが光る画風。

渡辺華山 (1793-1841)：江戸時代後期の政治家・画家。本格的な俳画論を残している。

- ・明治時代とそれ以後：

竹内栖鳳 (1864-1942)：近代日本画の先駆者で、戦前の京都画壇を代表する大家。

村上鬼城 (1865-1938)：子規・虚子の弟子。清心な俳人。

福田把栗 (1865-1944)：僧侶・漢詩人・俳人。

下村為山 (1865-1949)：俳味があり、俳画の芸術化に尽力した。

中村不折 (1866-1943)：漱石の友人。西洋画の要素を俳画に取り込む。

夏目漱石 (1867-1916)：南画風の山水画。

正岡子規 (1867-1902)：西洋画の写生の方法。俳画論。

小川芋銭 (1868-1939)：自然を愛し、農民を愛した俳画家。

松瀬青々 (1869-1937) 子規・虚子の弟子。「ホトトギス」の編集。

臼田亜浪 (1879-1951)：抒情的であり、雄大な自然詠。

渡辺水巴 (1882-1946)：江戸趣味と唯美的な情緒。

小川千甕 (1882-1971)：芭蕉・蕪村・良寛に影響を受けた。仏典・漢文・国文にも造詣が深い。

荻原井泉水 (1884-1976)：無季自由律俳句を提唱。自由闊達な俳画。

秋山秋紅蓼 (1885-1966)：俳人、ホトトギス門下。

芥川龍之介 (1892-1927)：丹精で繊細な感覚の俳句、俳画も描く。

内島北朗 (1893-1978)：長野の陶芸家、俳人。

赤松柳史 (1901-1974)：中国の古書画や古今の俳画研究がある。

直原玉青 (1904-)：南画の第一人者。

藪本積穂 (1907-)：現代俳画の第一人者。

岩崎巴人 (1917-)：禅の不思議な俳画世界。

足立玉翠 (1931-)：現代的な俳画作風の展開。

4. 心の原風景とは

4.1 中野孝次「清貧の思想」

1992年、バブル景気直後の飽食の時代、中野孝次は、「清貧の思想」を出版し、カネとモノを追い求めた日本人の空虚な精神性を痛烈に批判した。

彼はこの中で、西行、本阿弥光悦、鴨長明、良寛、池大雅、与謝蕪村、吉田兼好、松尾芭蕉らの生き方を紹介し、「日本にはかつて清貧と言う美しい思想があった。所有に対する欲望を最小限に制限することで、逆に内的自由を飛躍させるという逆説的な考えがあった。」^①と述べ、「清貧とは清らかで自由な心の状態」と見ている。ちなみに、岩波国語辞典では、清貧とは「無理に富を求めようとはせず、行いが清らかで貧しい生活に安んじていること。」と定義している。

筆者は、この「清貧の思想」と俳句や俳画に内在する原初的イメージである「心の原風景」とは、日本人のみならず人類にとっても、心の奥底に流れている共通の原イメージであると考えている。例えば、里山、小川、湧き水、水車、雑木林、茅葺の家、柿の木、放し飼いの鶏など、誰の心にも宿る懐かしいイメージである。

大辞林 第三版 (三省堂)では、[原風景]とは、「①原体験から生ずる様々なイメージのうち、風景の形をとっているもの。②変化する以前の懐かしい風景。」とあり、心の奥

底に流れている共通の原イメージであると考えられよう。

4.2 奥野健男「文学における原風景」

奥野健男は『文学における原風景』の中で、文芸作家達の作品の底に流れる潜在意識的なイメージを「原風景」と呼び、次のように述べている。

「作家にとって鮮烈な原イメージを含み、それを支える広く深いフィールド全体をここでは“原風景”と呼んでみたい。それは作家を形成してきた時空間であり、風土であり、作家の美意識や作品のイメージやモチーフを支える深層意識的な舞台である。」²⁾

また宮沢賢治の作品については、以下のように述べている。

「宮沢賢治の場合は『銀河鉄道の夜』と表現し、またイーハトーブと名付けた北上山系一体を“原風景”と考えたい。つまり彼らの幼少年期の、さらには青春期の自己形成空間として深層意識の中に固着し、しかも血縁、地縁の重い人間関係もわかちがたくからみあった、彼らの文学を無意識のうちに規定している時空間、それを象徴するイメージを“原風景”と定義したいのだ。」³⁾

宮沢賢治は岩手県雫石町の小岩井農場とその周辺の景観を愛好し、彼の詩集などにもその景観が原風景的イメージとして描かれている。上の風景写真は、賢治がイーハトーブと名付けた北上山系一体の“原風景”的なイメージと考えられよう。

さらに、賢治の代表的な詩「雨ニモ負ケズ」に次のような一節がある。

一日ニ玄米四合ト 味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ ジブンヲカンジョウニ 入レズニ ヨ
クミキシワカリ ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ 小サナ萱ヅキノ 小屋ニキテ
東ニ病氣ノコドモ アレバ 行ッテ看病シテヤリ...

「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ小サナ萱ヅキノ小屋」のイメージは、宮沢賢治の文学世界を象徴する原風景的イメージとして、彼の「謙遜・謙虚」や「人に仕える精神」を具現化し



岩手の茅葺の小屋：賢治の小屋のイメージ⁵⁾

たものではなからうか。

4.3 ユングの集合的無意識、元型そしてマンダラ

風景とは、辞書的な定義で言えば、身体感覚でとらえられる周囲の様子、特に目に見える景色を、主観的に構築し直した結果顕われる様子・景色のことである。一方、その「風景」に「原」を付けて「原風景」となると、全ての人類共通に見られる深層意識的イメージが浮かび上がってくる。

カール・グスタフ・ユング（1875-1961）はジークムント・フロイト（1856-1939）の無意識の概念に影響を受け、それをさらに深化させ、「集合的無意識」や「元型」という概念を仮定している。

「無意識のある程度表面的の層が個人的であることは、疑いない。これをわれわれは個人無意識と名づける。しかしこの個人無意識は、個人的経験や獲得から生じるものではなくもって生まれてくる、もっと古い層のうえにのっている。この深層がいわゆる集合的無意識である。…いい換えればこの無意識は、すべての人間においてつねに同一であり、したがって超個人的性質のだれにでもある普遍的な心の基層をなしているのである。」⁶⁾

ユングの「集合的無意識はだれにでもある普遍的な心の基層である。」という考えは、「原風景」というイメージとどこかで重なり合うと筆者は考えている。ユングは精神病患者の治療経験や世界各地の神話や宗教の研究から、人間は誰でもある共通した原イメージをもっているのではないかと、すなわち、集合的無意識の内容も一定の秩序やパターンによって決定されていると考え、その形式を「元型」と呼んでいる。

また、ユングは人間が抱く自己の存在の在り方を巡って、東洋思想、特にチベット仏教に興味を持ち、特にそのマンダラ（曼荼羅）という円形の絵図に「宇宙的自己の全体像と自己の完成のイメージ」⁷⁾を見ている。

本稿では、「集合的無意識」や「元型」そして「マンダラ」といったユングの基本概念が心の原風景的イメージとどこかでつながり、重なり合っていると考えており、今後の研究課題として指摘しておきたい。

4.4 日本の原風景「白川郷」

原風景と言え、日本人の心に浮かぶ典型的なイメージは白川郷の合掌集落であろう。雪明かりに浮かびあがる合掌造りの集落は、厳しい冬の寒さの中で肩寄せ合う家族の絆を思わせ、日本人のみならず外国人にとっても懐かしい心の故郷のイメージであろう。

養蚕のための高い屋根と屋根裏部屋は、大家族の絆を象徴し、厚い茅葺の屋根の葺き替えは、村人総出で助け合う「結」という村落共同体意識をも象徴しているようだ。厳しい生活

を支え合う集団精神と家族の強い心の絆が生んだ合掌家屋は、誰もが憧れ、懐かしく思い浮かべる建築物の原風景である。



白川郷における雪の合掌屋⁸⁾

5. 俳句と俳画における原風景

ここでは芭蕉、蕪村、一茶といった俳句史上著名な3俳人の俳句と俳画を取り上げ、そこに見られる伝統的な原風景、特に茅葺屋根の家屋に関連する家のイメージを紹介する。俳人たちにとって、家のイメージは自己という存在を守り育て、心の拠り所となる母性的な場所を思わせるからである。

5.1 松尾芭蕉 (1644-1694)

芭蕉誕生の地、伊賀上野には、「芭蕉五庵」(無名庵・蓑虫庵・東麓庵・西麓庵・瓢竹庵)と呼ばれる芭蕉に関係する草庵があったが、唯一現存するのがこの蓑虫庵である。



芭蕉による蓑虫庵の俳画 (部分)⁹⁾

芭蕉の門弟服部土芳は、貞享5年(1688)、伊賀上野の城下町の閑静な場所に、些中庵という草庵を開いた。ちょうど「笈の小文」執筆の旅の途中で、伊賀上野に帰っていた芭蕉がこの庵を訪れ、草庵新築のお祝いとして「みのむしの音を聞にこよ草の庵」という句を贈ったことから、蓑虫になぞらえ、蓑虫庵と呼ばれるようになったとのことである。

この庵は元禄12年(1699)に家事に会い、焼失したが、後に再建され、芭蕉が亡くなった後も蕉風俳句を広める場所として、利用された。庵はその後所有者が変わるなどの歴史を経たが、昭和30年(1955)からは一般に公開されている。

芭蕉は後に「みのむしの音を聞にこよ草の庵」という句に俳画を添えて、自分が愛好する芭蕉の木を描き、まるで自分の理想の草庵のイメージとして、俳画を描いている。

この俳画には芭蕉が自己の蕉風俳句の理想として追求した閑寂なわび・さびの内的世界が写し取られており、芭蕉が憧れた俳句的な心の原風景と考えることができよう。

5.2 与謝蕪村 (1716-1783)

与謝蕪村は、松尾芭蕉、小林一茶と並んで江戸俳諧の巨匠の一人であり、イメージ豊かな俳画の創始者であり、写実的で絵画的な句を得意とした。当時の俳諧(技巧主義と通俗化)を憂い『蕉風回帰』を唱え、江戸俳諧中興の祖ともいわれている。

蕪村の代表作の1つに「月天心貧しき町を通りけり」(1768年8月の作)という静謐な句がある。よく晴れた秋の夜、天空の中心に月が輝いている。その薄明かりの中、貧しい風情の家々が立ち並ぶ町を通り過ぎようとしている。蕪村は貧しき町とうたっているが、毎日を精一杯働き、まじめに生活を営んでいる人々に共感を寄せ、愛情と尊敬を持って表現したものであろう。他者に対するこのような共感がかんじられるために、我々読者もこの句に心の原風景的な安らかなイメージを抱くものと思われる。

この句に対する蕪村の俳画は作られていないが、この句のイメージと響きあう蕪村の絵画を紹介する。彼の最高傑作とも言われる「夜色楼台雪万家図」(1778頃?)であり、晩年の作品である。

この山並みと民家の家々と屋根が折り重なる風景は、京都の東山連峰と京都市内を思わせるが、現実の風景というより、心に浮かぶ想像上の家並みを描こうとしたのではないだろうか。黒々とした冬の夜空から重く、厚く降り積もる雪は、富む者にも貧しき者にも等しく降り積もるようだ。

中野孝次はこの絵に対して、「人影はどこにも見えないが、この画を見ているとわたしは一種の茫漠とした詩情が湧くの

を覚え、これらの雪をかぶった屋根の下に身を潜めるように暮らしている人々の存在を感じずにはいられない。夜の雪であるところがいい。」⁽¹⁰⁾と述べ、寒い冬の日々を片寄せあって生活している人々に共感を寄せているようだ。



蕪村による夜色楼台雪万家図（部分）⁽¹¹⁾

5.3 小林一茶 (1763-1828)

小林一茶の句と俳画は彼の生い立ちと関係が深く、ここでは簡潔に彼の生涯に触れておきたい。

一茶は、1763年、信濃北部の北国街道柏原宿（現長野県上水内郡信濃町大字柏原）の農家の長男として生まれた。3歳の時に母を失い、8歳の時、継母を迎えるが、その継母に馴染めず、確執を生じたため、1777年、14歳の時、江戸へ奉公に出る。25歳のとき小林竹阿（二六庵竹阿）に弟子入りし、俳諧を学ぶ。

1791年、29歳の時、故郷に帰り、翌年から36歳の年まで俳諧修行の旅に出、近畿・四国・九州を訪れる。

1801年、39歳の時、病気の父を看病するため再び故郷に戻ったが、程なく父は亡くなり、遺産相続の問題が生じ、それ以後継母や義弟と12年間争うことになる。一茶は再び江戸に戻り俳諧の宗匠を務めながら、遺産相続の争いに悩んだ。

1812年、50歳の時、故郷に帰り、28歳の若い妻きくと結婚し、3男1女をもうけるが、どの子も幼くして亡くなった。妻のきくもまた37歳の短い生涯を閉じた。

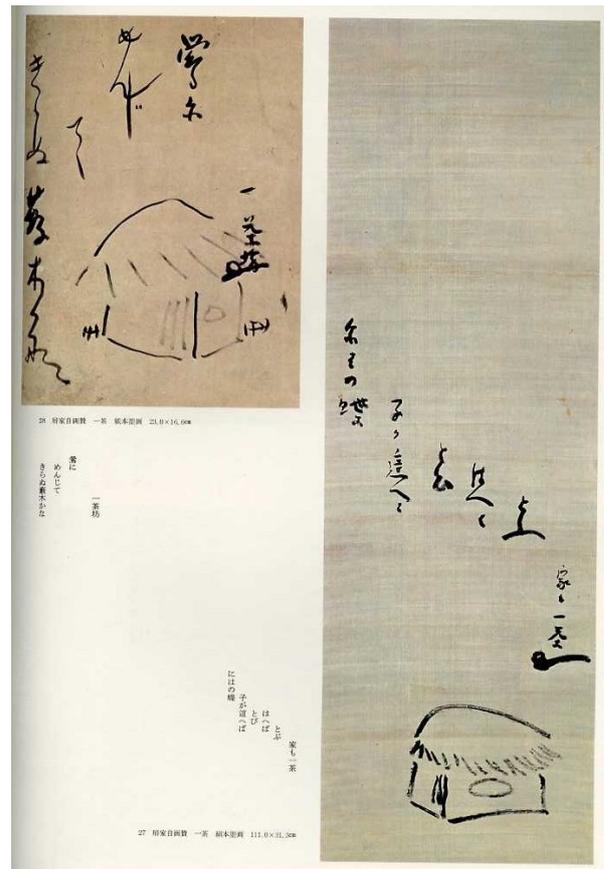


晩年蕪村が住んだ信州信濃の土蔵⁽¹²⁾

62歳で2番目の妻（田中雪）と結婚するが、半年で離婚した。64歳で3番目の妻やをと結婚し、女子が産まれるが、一茶は娘の顔を見ることなく、65歳で孤独な、寂しい人生を終えた。

一茶の人生は、何よりも家族に恵まれることのない人生であった。幼くして母を失い、継母とは争い、結婚して子供をもうけても、4人の子供を幼くして失った。このような悲しく、寂しい人生を見つめることから、彼の俳句や俳画が生まれたといえよう。

2枚の俳画が並びで挙げてあるが、左側の俳画の賛（句）は「鶯にめんじて切らぬ藪木かな」であり、右側の俳画の賛は「にはの蝶子が這へばとびはへばとぶ」である。いずれの俳画も粗末ではあるが、家族が肩を寄せ合うことのできる茅葺屋根の小さな家であり、暖かい家庭というものを味わうことのできなかつた一茶が、心から憧れた仲の良い家族のための家である。特に「にはの蝶子が這へばとびはへばとぶ」の賛と画は、一茶の幼くして亡くなった子供たちへの想いが溢れており、粗末な茅葺の家屋は、彼の心の原風景を思わせるイメージとなっている。



一茶の俳味溢れる俳画⁽¹³⁾

このように一茶の俳画はわざと稚拙な筆運びであり、まるで子供の落書きのように見えても、むしろ味わいがある。

芭蕉や蕪村の高雅で巧みな俳画とは異なり、省筆、余白、淡彩、稚拙、そして素朴さなどが一つに融合し、「俳味」とも呼ぶべき不思議な味わいを感じさせるのが一茶の俳画の優れた特徴である。

終わりに

以上のように、第1章から第3章までは、俳句の歴史、水墨画の歴史、そして俳画の歴史をまとめた。第4章では、心の原風景とは何かという観点から、中野孝次「清貧の思想」について思想的な側面から、奥野健男「文学における原風景」においては文学的な側面から、ユングの集団的無意識については心理学的な側面から、そして日本の原風景としての「白川郷」に関しては、建築的側面から、それぞれ心の原風景の持つ意義を分析した。

さらに第5章においては、江戸俳諧の巨匠である松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶たちの俳句や俳画に見られる心の原風景的イメージ（特に家族の絆を見守る家屋のイメージ）を取り上げ、彼らが発展させた俳句や俳画などの短詩型文学の歴史と重ね合わせながら、その成立から展開、その意義と評価などに関して考察し、合わせて短詩型文学の魅力について述べた。

このように、俳句や俳画に見られる心の原風景的イメージは、江戸時代の俳諧の巨匠である松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶たちの俳句や俳画に見られるのみならず、その後の俳人たち、三浦樽良、松村月溪、竹内栖鳳、下村為山、中村不折、正岡子規、小川芋銭、臼田亜浪、渡辺水巴、小川千甕、直原玉青、藪本積穂、岩崎巴人など、現代に至るまで、数多くの俳人たちに大切に受け継がれている。そこに見られる心の原風景的イメージは、俳人たちにとっても、自己という存在を守り育て、心の拠り所となる母性的な場所を暗示しており、今後人々の心の奥底に生き続けていくことであろう。

註

- (1) 中野孝次著『清貧の思想』文芸春秋、1992、p. 161.
- (2) 奥野健男著『文学における原風景』集英社、1972、p. 44.
- (3) 同書、p. 45.
- (4) 以下から「雨ニモ負ケズ」の詩を引用させていただいた。
<http://www2.odn.ne.jp/~nihongodeasobo/karuta/amenimomakezu.htm>
- (5) 以下から茅葺の小屋の画像を引用させていただいた。
https://tabidachi.ana.co.jp/storage/photo/1795/42334_2.jpg
- (6) C. G. ユング著、野村美紀子訳『ユングの象徴論』思索社、1981、pp. 138-139.
- (7) 秋山さと子著『ユング心理学へのいざない』サイエン

ス社、1982、p. 101.

- (8) 以下から和田義男氏の俳句「振り向けば雪の切れ目に合掌屋」と合掌屋の画像を引用させていただいた。
<http://wadaphoto.jp/hbyakkon03.htm>
- (9) 以下から芭蕉による蓑虫庵の俳画を引用させていただいた。<http://www.city.iga.lg.jp/ctg/22054/22054.html>
蓑虫の音を聞きにこよ草の庵（いほま）
- (10) 『清貧の思想』p. 104.
- (11) 以下から蕪村による夜色楼台雪万家図（部分）画像を引用させていただいた。
<http://blog.goo.ne.jp/supika09/e/3c87dfd53c12db0c588d6f349d115a24>
- (12) 以下から一茶の土蔵の画像を引用させていただいた。
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E6%9E%97%E4%B8%80%E8%8C%B6>
- (13) 『俳人の書画美術第6巻、一茶』、集英社1978、p. 103.
俳画の名称はいずれも『屑屋自画賛』である。

参考文献

- (1) 秋元不死男『俳句入門』角川書店、1971
- (2) 石原八束『俳句の作り方』、明治書院、1976
- (3) 石寒太『初めての俳句の作り方』成美堂、2007
- (4) 村山古郷『俳句用語の基礎知識』角川書店、1984
- (5) 雲英末雄『芭蕉、蕪村、一茶の世界』美術出版社、2007
- (6) 鷺谷七菜子、『現代俳句入門』文化出版局、1989
- (7) 岡田利兵衛著『蕪村と俳画』、八木書店、1997
- (8) 岡田利兵衛著『芭蕉の書と画』、八木書店、1997
- (9) 豊島宗七『俳画のすすめ』秀作社出版、2000
- (10) 足立玉翠『俳画の心得』日貿出版社、2004
- (11) 直原玉青『俳画入門』保育社、1971
- (12) 藪本積穂『俳画のすすめ』秀作社出版、1993、
- (13) 呉斉旺『はがきに描く水墨画』日貿出版社、2010
- (14) 宮坂宥勝『空海密教の宇宙』大法輪閣、2008
- (15) 樋口和彦『ユング心理学の世界』創玄社、1978
- (16) カルヴィン S・ホール著、西川好夫訳『フロイト心理学入門』清水弘文堂、1976
- (17) 日本絵手紙協会編『絵手紙・俳画の上手な作り方』技術評論社、2003

(提出日 平成25年1月11日)